

プレスリリース
平成 25 年 8 月

「幸田文」展 一会って見たかった。

Koda Aya Exhibition

世田谷文学館 平成 25 年 10 月 5 日（土）～12 月 8 日（日）

広報用画像



昭和 54 年 12 月、自宅庭にて（撮影：片岡露満）

本展広報に関するお問い合わせ先
世田谷文学館学芸部学芸課
担当：庭山・瀬川
〒157-0062
東京都世田谷区南烏山 1-10-10
TEL：03-5374-9111

【開催趣旨】

父・幸田露伴の思い出を綴り 40 代でデビューした幸田文（こうだ・あや 明治 37-平成 2/1904-1990）は、『流れる』『おとうと』がベストセラーとなり、50 代半ばに早くも『幸田文全集』が編まれるなど一躍流行作家となりました。

しかしその後、幸田文は精力的に執筆活動を続けながらも、ほとんど自作を本にまとめていません。60 歳を過ぎて、奈良斑鳩の法輪寺三重塔再建のために奔走し、さらに 70 歳を超えて全国の樹木や地崩れの現場を訪ね歩きました。『木』や『崩れ』などの晩年の作品が刊行されて読者を驚かせるのは彼女が 86 歳で没した後のことでした。

幸田文は後半生の行動のきっかけを「種が芽を吹いた」と表現しています。

「心の中は知る知らぬの種が一杯に満ちている、と私は思う。何の種がいつ芽になるか、どう育つかの筋道は知らないが、ものの種が芽に起き上がる時の力は、土を押し破るほど強い」（『崩れ』）。

死の床を迎えた肉親を看取ること、「みそつかす」であった不遇な自分の内面を見つめることから出発した幸田文は、やがて胸の中の「たね」をひとつひとつ取り出し、執筆の幅を広げてゆきます。日々の暮らしや人事にとどまらず、草木や動物、揺れ動く大地にいたるまで、心を寄せた対象に身体ごとぶつかり、命あるもの全てがかかえる哀しみと強さとを描き出す特異な文学の境地を切り拓きました。

本展は、幸田文を単独で取り上げる初めての本格的な展覧会です。父を看取る 40 代まで、一人の無名の女性として生きた彼女の前半生に蒔かれた「たね」が、作家・幸田文の中でどのように力強く芽吹いていくかを、初公開を含む原稿、書簡、愛用の着物や父・露伴の遺した書など資料約 300 点を通して見てゆきます。

共感する力が、身近なものの中にも愛しむべき無数のものがたりを発見させてくれることを幸田文の文学は教えてくれます。そして、行動する力が、折れそうになる心と身体を一步前に進ませてくれることも。

本展を通じて、あなた自身の心の中に満ちている「たね」を見つけ出し、明日を生きる力を得ていただくきっかけになれば幸いです。

みどころ

- ① 幸田文を単独で取りあげる初めての本格的な展覧会です。
- ② 原稿、書簡など初公開を含む豊富な自筆資料で構成します。
- ③ 強い美意識と高度なコーディネート術がうかがわれる愛用の着物を複数展示します。
- ④ 文豪・幸田露伴の書や愛用品もあわせて展示・出品します。
- ⑤ 生前未刊行の『木』『崩れ』の原稿、創作メモなどを通じて行動する作家・幸田文の姿を浮き彫りにします。

【展示構成】

プロローグ 「胸の中の古い種」

——思いたつとは、発芽に似ている。（「胸の中の古い種」より）

晩年の幸田文の並外れた行動力の原点ともいえるのが「胸の中の古い種」。法輪寺三重塔復元に奔走した時期のエッセイ「胸の中の古い種」を自筆原稿と引用文で紹介。

「無理だとか、とんだとかで押えきれないのが、思いたつたということだろうか。思いたつとは、発芽に似ている。」（「胸の中の古い種」）

第1章 『みそっかす』

「明治三十七年九月一日。暴風雨のさなかに私が生れたという。」（『みそっかす』）

幸田文は明治の文豪・幸田露伴の次女として、東京向島に生まれた。6歳で母を失い、8歳のときに露伴が再婚。家事一切を露伴にきびしくしつけられた。

22歳のとき、弟が結核で死去。24歳で酒問屋に嫁ぐが次第に家業が傾き、10年ほどで離婚。娘の玉を連れて露伴の元に戻った。

本章では、文の生いたちと共に、父・露伴の兄弟姉妹に実業家、探検家、音楽家、歴史学者を輩出した「幸田家の人びと」についても紹介する。



女子学院のころ 左より文、同級生、その姉

第2章 小石川の家 — 『父・こんなこと』

昭和 22 年 7 月、父の最期を看取る。その前後から書き始めた露伴の周辺を綴った文章で好評を博し、思いがけなく文筆の道に進むことになる。

本章では、父・露伴の遺した書や幸田家に伝わる品々を通して、深い愛情で結ばれた父と娘の姿を見てゆく。



昭和 13 年 5 月、小石川蝸牛庵にて 右より露伴、文、玉
(撮影：小林勇)

第3章 父の思い出から離れて — 『流れる』『おとうと』

文名の高まるなか、「私が文章を書く努力は私としては最高のものではなかった」「努力しないで生きてゆくことは幸田の家としてもない生き方」と、断筆を宣言して柳橋の芸者置屋に住み込みで働き、その経験をもとに長編小説『流れる』を発表、作家としての地位を確立する。本章では『黒い裾』『おとうと』『北愁』など自伝的要素の強いフィクションも紹介し、執筆の幅を広げてゆく昭和 20 年代から 30 年代にかけての文の姿をたどる。



昭和 31 年 1 月、小石川の家の前で



映画『おとうと』撮影現場の幸田文と監督の市川崑

第4章 幸田文の「このよがくもん」

露伴に鍛え抜かれた美意識と、自分の目で確かめ、身体全体で納得したことのみを書く態度で執筆された作品群を身の回り品などとともに紹介する。「だいどころ」「みとり」「きもの」「季節のうつろい」「女性の自立」「老いじたく」「父のおしえ」などのキーワードに沿って展示。



「ルポルターージュ男」より 昭和34年1月、都内の病院で肺の外科手術を取材



「婦人公論」昭和34年6月号 静岡県千頭国有林にて

第5章 種が芽を吹く ——斑鳩の記、『木』『崩れ』

60代の幸田文は、奈良・斑鳩^{いかるが}の法輪寺三重塔再建に力を注いだ。70代は、北は北海道、南は屋久島までの木々を歴訪し、木の生命に思いを馳せた『木』、大沢崩れをはじめ全国の山河の崩壊地を行脚した『崩れ』を執筆。そこでは、大地の生命や衰えに、幸田文自身のいのちや老いの問題が重ねあわせられていた。

本章では、『木』『崩れ』に連なる「見てある記」と呼ばれた作品群を紹介。40歳を過ぎて作家となった幸田文が、随筆、小説といったジャンルの括りから解き放たれ、実生活の負の体験をも昇華させて独自の世界に至る過程を、原稿や関連資料からたどってゆく。



昭和51年10月、富山県常願寺川上流の鳶山の崩壊を見る
(撮影・八木下弘)

第6章 幸田文ふたたび

平成2年10月31日永眠。生前刊行されなかった『崩れ』『木』『台所のおと』『きもの』などの著作が相次いで刊行されると、一躍幸田文ブームとなり、その人気は衰えることなく続いている。本章では、文没後の長女の青木玉、孫の青木奈緒の活躍も紹介しながら、幸田文の文章がなぜ現代人の心の琴線に触れるのかを検証する。

【関連イベント】

1. 講演会

(1) <男>が語る幸田文

講師：村松友視（作家）×堀江敏幸（作家）

日時：10月27日（日）14:00～15:30

参加費：500円／事前申込による抽選150名

(2) 崩れる大地と生きること（仮）

講師：青木奈緒（幸田文孫・作家）×田畑茂清（エッセイスト・農学博士・元建設省砂防部長）

日時：11月23日（土・祝）14:00～15:30

参加費：500円／事前申込による抽選150名

(3) <女>が語る幸田文

講師：青木玉（幸田文長女・作家）×森まゆみ（作家）

日時：12月1日（日）14:00～15:30

参加費：500円／事前申込による抽選150名

申込方法

各開催日の2週間前（必着）までに往復はがき、またはメール（kodaaya★setabun.or.jp ※★を@に変えてください）で、①イベント名・開催日 ②参加希望者全員の氏名 ③連絡先住所 ④電話番号 を明記の上、世田谷文学館「幸田文展」係まで。各回ごとにお申し込みください。応募者多数の場合は抽選。

2. ワークショップ

(1) 一本の<木>に会いに行こう！（子ども編）

講師：須藤正男（森林インストラクター・カメラマン）

日時：11月3日（日）7:30～17:30 当館集合・解散

対象：小学4年生～中学生

参加費：無料（交通費は実費）／事前申込による抽選15名

*平成25年度子どもゆめ基金助成活動

(2) 一本の<木>に会いに行こう！（家族・大人編）

講師：須藤正男（森林インストラクター・カメラマン）

日時：11月10日（日）12:00～16:00 京王線高尾山口改札集合・解散

対象：小学生以上の家族連れ（大人の方だけでも参加できます）

参加費：無料（交通費は実費）／事前申込による抽選20名

*平成25年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館支援事業



申込方法

(1)は10月18日（必着）、(2)は10月25日（必着）までに往復はがきで、①イベント名・開催日 ②参加希望者全員の氏名・年齢 ③連絡先住所 ④電話番号 を明記の上、世田谷文学館「幸田文展」係まで。各回ごとにお申し込みください。応募者多数の場合は抽選。

3. 映画上映会＋トーク

上映作品：『飛鳥を造る』（1976年/四季映画放送/監督：松川八洲雄/50分/DVD上映）

トーク出演：小川三夫（宮大工）

日時：10月13日（日）14:00～16:00

参加費：500円／当日先着100名

4. 朗読会 《幸田文を読む 『木』『崩れ』『髪』『おとうと』》

出演：声を楽しむ朗読会（代表：大谷紀幸） 解説：福島勝則（多摩美術大学教授）

日時：11月9日（土）14:00～16:00

参加費：無料／当日先着100名

【開催要項】

展覧会名 「幸田文」展

会期 平成25（2013）年10月5日（土）～12月8日（日）

会場 世田谷文学館 2階展示室

開館時間 10:00～18:00

（展覧会入場、ミュージアムショップは17:30まで）

休館日 毎週月曜日（ただし10月14日、11月4日は開館、翌日休館）

観覧料 一般700円（560）、高校・大学生500円（400）、小中学生250円（200）
65歳以上・障害者350円（280） *（ ）内は20名以上の団体料金

交通案内 京王線：芦花公園駅南口から徒歩5分

小田急線：千歳船橋駅から京王バス（歳23系統「千歳烏山駅」行）
「芦花恒春園」下車徒歩5分

主催 公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館

監修 堀江敏幸、森まゆみ

協賛 株式会社ウテナ

後援 国土交通省、世田谷区、世田谷区教育委員会



公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062

東京都世田谷区南烏山1-10-10

TEL03(5374)9111 FAX03(5374)9120

ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>

「幸田文」展
広報用画像貸出申込書

世田谷文学館学芸部 庭山・瀬川 行
FAX 03-5374-9120

展覧会広報用として画像(P.1掲載)をご用意しています。ご希望の際は下記貸出条件をご確認のうえ、本申込書に必要事項をご記入いただき、FAXにてお申し込みください。EメールにてJPGデータで画像をお送りいたします。

なお、本展記事をご掲載いただく際は、恐れ入りますが情報確認のため、掲載前に校正紙をお送りください。また、発行後、掲載誌を1部お送りください。

※読者・視聴者プレゼント用に招待券をご用意しています。ご希望の場合は、あわせてお申し込みください。(招待券の手配は9月10日以降になります。プレゼント当選者への発送作業は御社にてご負担ください。)

広報用画像貸出条件

- 画像は展覧会紹介の目的のみにご使用ください。
- 画像のトリミング、画像に文字を重ねるレイアウトはお控えください。
- 画像データは、ご使用后必ず消去してください。
- 画像データを第三者に渡すことを禁じます。
- インターネット上で掲載する場合には、画像をコピーできないよう処置し、会期終了後は必ず削除してください。
- 画像には「撮影：片岡露満」のクレジット表記をお入れ下さい。

掲載雑誌名・番組名・WEBサイト名

媒体種別 新聞・雑誌・フリーペーパー・テレビ・ラジオ・WEBサイト

発売・放送・更新予定日

御社名

御担当者名

御住所

Eメールアドレス

電話番号

FAX 番号

プレゼント用招待券のご希望(ご希望の場合は印をつけてください)

5組10名様分 10組20名様分